実践知性としての英文学研究

宇佐見 太 市

関西大学出版部

［まえがき］

拙著『ディケンズと「クリスマス・ブックス」』（関西大学出版部、2000年3月）の［あとがき］に、「人間の血の通った文学研究…エッセイクリティシズムこそ私のとるべきアプローチだ」と書き、筆者は本心を明かした。通常、英米文学の分野に限らず、大学を初めとした研究諸機関や学会を中心としたアカデミズムの場においては、研究対象が何であれ、科学という名のもとに、客観主義や普遍主義が重んじられ、そこに少しでも主観的な臭いが感じられた時点でその研究はアカデミズムの世界から弾き出されることになる。当時の筆者はまだ50歳代前半の英文学研究者として働き盛りであったので、一抹の不安を残しながらも、しかし、自分のありのままの姿を曝け出す覚悟で上記単行本を刊行したものである。

団塊の世代の最後の生まれ（1950年2月）である筆者が英文学研究に着手した頃、日本の英文学研究界には地殻変動が起こり始めていた。学問研究のパラダイムシフトと言ってもいいだろう。

たとえばニュークリティシズムという用語と概念については、既に学部時代から聞き慣れていたが、ポスト構造主義、ポストモダン、ニューヒストリシズム、そしてポストコロニアルといった文学用語が矢継ぎ早に登場するのには、正直なところ閉口した。当時、西洋のこうした文学理論に精通していた大江健三郎（『小説の方法』、岩波現代選書、1978）や筒井康隆（『文学部唯野教授』、岩波書店、1990）などの著書に感化された英文学研究者もいたのではないだろうか。

作品から作者の意図を探るという、昔ながらのオーソドックスな手法が否定されたかのように当時の筆者には思われた。現に筆者自身、本能的にそうした時代の新しい風・空気を敏感に察知して、1976年（昭和51年）1月に

大阪教育大学大学院に提出した修士論文は、文学作品をレトリック理論で分析するという、筆者には珍しい、インパーソナルなものに仕上げた。読書感想文的なものは学術論文ではないという、強迫観念に囚われていた。理論的装いの研究アプローチこそ、やがて博士課程後期課程に進学するための処世の要諦だと、筆者は直感的に感じ取っていたのであろう。今から思えば、処世術に長けた若者だった。これが功を奏したのか、無事、関西大学大学院の文学研究科博士課程後期課程英文学専攻に現役で入学することができた（当時の入試競争率は十数倍で厳しかった）。

しかしドクターコース進学後は、この研究手法に馴染めず、悩み続けた。心の奥底からほとばしる喜びが欲しかった。文学の醍醐味を味わいたかった。各種文学理論を使えば、なるほどそれなりにいかにも学術論文らしきものが生み出されることは、かつて修論作成で学習したものの、それがどうしても己の肌に合わなかった。他人を騙すことはできても自分を騙すことはできなかった。二十歳代半ばから後半にさしかかっていたときである。研究のための研究というものに対して、筆者は違和感を覚え始めたのである。そんな折り、英文学者・小池滋の『ディケンズ―19 世紀信号手』（冬樹社、1979）に出会い、筆者は救われた。「標準的なアプローチをもって、ディケンズの人と作品に迫ることははじめから断念することにして、私の、よく言えば個性的、悪く言えば手前勝手なやり方で、筆を進めさせていただきたいと思う」という文章で始まる小池滋の『ディケンズ―19 世紀信号手』は、パーソナルなアプローチによる文学研究の確固たる存在意義をはっきりとこの世に示してくれたと、筆者には思われた。筆者にとっては、目から鱗であった。小池滋のこの本は筆者に命の水を注いでくれ、おかげで活力を取り戻すことができた。小池滋は、筆者の命の恩人である。

文学理論に振り回されるのではなく、文学作品と素直に向き合い味読することで、当時の筆者は精神的に成長したかったのだと思う。己の精神的未熟

さに嫌悪感を抱いていたからである。当時の筆者は、どちらかと言うと、時代の風潮もあったと思うが、ESS（英会話）活動などを通じて現実の外部世界の方に目を向けがちの外向的青年だったので、それを何とかして外ではなく、むしろ己の内面的・精神的世界に沈潜できるタイプに修正したいともがいていたのである。軽佻浮薄から脱して、精神的成熟なるものに憧れたのである。そのためにも文学と真摯に向き合おうとしたのだろう。

こうして立ち直った筆者は、自己の信ずる論文を若さにまかせてどんどん執筆したが、この研究手法は学術研究の場ではやはり容認されないということが、ある時、明らかになった。今から 25 年以上も前のことではあるが、教授昇格の審査終了後、学科主任から、「注」が少なすぎて学術的ではないというのが審査会の結論である、と告げられた。現にあの頃の筆者は、或る文芸雑誌の編集に携わっており、そこに集う人たちの中にはマスコミ出身者がいて、彼らからの影響を知らず知らずのうちに受けていたと思う。引用に頼るのではなく、考え抜いた末、己の言葉で堂々と文章を綴る人たちに囲まれていた。その後筆者は、学術論文の世界では己の真情を吐露するだけではなくて、「注」をふんだんに用いて客観的理論武装にも努めねばならないと思い至った。

でもまだあの頃は、英文学研究界にとって、良き時代であったと思う。大学を舞台にして、英文学研究家ということで、高等遊民的生活を享受することができたのだ。世間も我々英文学研究者に寛大であった。P. G. ハマトンが著書『知的生活』（1873）の中で説く、まさに知的生活をしんから満喫することが許容された。

ところがいつ頃からであろうか、特に筆者に関する限り、関西大学内での学内移籍ならびに新機構・新研究科・新学部等の立ち上げが続き、その流れの中で、筆者は「英文学研究者」としての力量ではなく、「英語教育学者」としての力量が問われるようになった。もう二十年も前の話になるが、新学

部創設ならびに学内移籍に際して、日本で初めて本格的にCNNの教材開発に取り組んだのが英語教育学との最初の出会いである。そしてなぜか、運命のいたずらで、筆者が、関西大学の「英語科教育法」をも担当することになった。

筆者は学内移籍を繰り返す過程で、本学文学部の英文学科にも都合5年間勤務したので、文学部英文学専攻の事情もよく知っているつもりであるが、文学部英文学科から完全に離れた後は、英語教育界への接近が顕著になり出した。しかし、だからといって英文学の授業から完全に離れることはなく、現行の大学院外国語教育学研究科の博士課程（前期課程・後期課程）ならびに外国語学部の演習や講義の中で相変わらず、英文学を取り上げてはいる。ただしその際の筆者の基本的姿勢は、「英語教育」の応用篇として「英文学」を位置づけるということである。筆者の所属は今、文学部・文学研究科ではなく、外国語学部・外国語教育学研究科であるので、自ずとそういう構えになったようである。

ところで、「英語教育」の応用篇として「英文学」を位置づけるとは一体どういうことなのか。その一例として、CNN教材作成で筆者が担当した章（第12章）を取り上げてみたいと思う。その章にはイギリスの文豪チャールズ・ディケンズが登場する。以下に筆者が書いたコラムを紹介しよう。

「2012年1月に、スイスの雪に覆われた山あいの保養地ダボスで、毎年恒例のダボス会議が開催された。ここには世界各国から経済界のリーダーたちが集い、地球規模のさまざまな問題を議論する。ただし、集まるのは各国を代表するエリート層が中心ということで、経済的弱者への視点が乏しいのではないかという批判があることも厳然たる事実である。イギリスのヴィクトリア朝時代に大いに活躍した、まさに英国を代表する国民的作家チャールズ・ディケンズ（1812－1870）は、独特のユーモアとペーソスを交えつつ、

当時のイギリス社会を鋭い風刺の眼で活写した小説家である。ディケンズ生誕200周年ということで本国イギリスは今、ディケンズブームに沸き立っている。今回、そんなディケンズになりきった記者が、ディケンズ風の語り口でダボス会議のもようを報告するという体裁になっている。それゆえに、実際のディケンズの作品からの引用やディケンズの作品名にまつわる言葉遊びも盛り込まれており、他の章とは一味違う特異なものとなっている。」(『CNN: ビデオで見る世界のニュース（14)』、関西大学英語教育研究会、朝日出版社、2013年1月）

上記の例は、筆者が目指すところの「英文学と英語教育の融合・結合」の実践例である。「英語教育」に軸足を置き、その中に「英文学」を取り込んでいくという手法は、筆者がいつのまにか編み出した方法であり、これを筆者は、英文学の側面から見て、「実践知性としての英文学研究」と名付けている。日本の英文学研究界が先細りしている現在、英語教育界との積極的な連携・提携が必須だと、筆者は確信している。関西大学で、次から次へと新組織（平成6年の総合情報学部、平成12年の外国語教育研究機構ならびに大学院文学研究科修士課程外国語教育専攻、平成14年の大学院外国語教育学研究科博士前期・後期課程、平成21年の外国語学部）の立ち上げに関わるなかで、筆者はそのような、「英文学と英語教育の融合・結合」という思いを強く抱くに至ったのである。

もちろん、英文学それ自体の活性化をも筆者は望んでいる。私たちの先人は、明治の昔から英文学の輸入と咀嚼に心血を注いできた。聡明で優秀な数多くの当時の先達の努力のおかげで、今や日本の英文学界は、百数十年の長い歴史を有する、本場英米の英文学とは一味違う、日本固有の文化遺産になった、と筆者は確信している。元々は英米から由来したものではあるが、今では日本が誇りうる、日本独自の英文学として確立したのではないだろう

か、と筆者はしんからそう思っている。だからこそ、この有意義な「知」の遺産、文化遺産を、日本の英語教育の領域に有効活用をしたいと切望するのである。

本書は、日本の英文学研究界の活性化にとって必要な処方箋を模索し、それを踏まえて、さらなる発展を目指すためには具体的にどうしたらよいかを探ったものである。温故知新の精神に則り、日本の過去の「知」の巨人たちの思索を追い、それを吟味・検証することによって、日本の英文学界が抱える諸問題を剔抉し、明日の英文学研究界のありようを見ようとした。これらをⅠ部「日本の英文学研究界」としてまとめた。

また、Ⅱ部「研究と考察」においては、筆者自身の過去から現在に至るまでの主要な思索の軌跡を振り返り、英文学研究界不振のこの時代にあってもなおかつ英文学研究界に進出したいと望む人に向けて、この本が一種の心の癒し、栄養剤になってくれれば、と願いつつ筆を執った。留学体験もなく、また、本場英米の土俵で勝負するわけでもない、ひとりの地味な大学英語教師が、あくまで軸足を日本の英語教育界に置いて、英文学と格闘しているさまをありのままに見て欲しい、と思っている。その際、英語と日本語という言葉への拘りをいかに大切にしようとしているかを感じていただければ、これ以上の喜びはない。

目　次

まえがき……i

第Ⅰ部　日本の英文学研究界

第1章：日本の英文学研究と戦争……3

第2章：「日本の英文学研究」考……15

第Ⅱ部　研究と考察

第1章：ドーラ頌 ――『デイヴィッド・コパーフィールド』論……49

第2章：増幅する自我 ――『デイヴィッド・コパーフィールド』論……61

第3章：『大いなる遺産』の謎……71

第4章：『大いなる遺産』の結末考……83

第5章：『大いなる遺産』の人物たち……101

第6章：『大いなる遺産』のピップ像……117

第7章：『大いなる遺産』――ヒロインの変容：虚像と実像の狭間で……131

第8章：『オリヴァー・トゥイスト』におけるナンシー像……145

第9章：『オリヴァー・トゥイスト』の謎……159

第10章：『オリヴァー・トゥイスト』――翻訳本に見るディケンズ像……173

第11章：*Hard Times* に関する一考察……185

第12章：*Hard Times* の謎……199

第 13 章：*Hard Times* における作家の人間洞察眼……213
第 14 章：*Hard Times* 再考……227
第 15 章：ディケンズの小説作法……241
第 16 章：E. M. フォースター『インドへの道』考……253
第 17 章：*The American* に関する一考察……279
第 18 章：英語教育における英文学研究の意義……301
第 19 章：英文学研究と言語意識……313
第 20 章：ブロンテ姉妹はわれらが救世主たりうるか……319
第 21 章：小説と読者……329
第 22 章：外国語教育における活字メディアの意義……335
第 23 章：活字メディアと映像メディア……361
第 24 章：英語科教育法の現状と課題 —— 担当者からの問題提起……371

初出一覧……385
参考文献……389
あとがき……409
人名索引……413
事項索引……418